

【寄稿】8大学参加ディベートリーグで

念願の1勝、価値ある1敗

経済学部・永江雅和ゼミが参加したディベートリーグの様子を、タウン誌で執筆経験のある4年次・水口麻衣子さんがレポートしてくれた。

永江ゼミ 水口麻衣子 <経済4>

10月8日、文京学院大学本郷キャンパスで、第3回経済史・経営史ディベートリーグが開催された。今年で2回目になるこのリーグに参加するのは専修、慶応、法政、文京学院、大東文化、白鷗と、新たに参戦した城西、関西の全8大学。

我が永江ゼミにとって、ゼミ活動のメインイベントといえる大会に懸ける意気込みは格別だ。2敗の結果に終わった昨年の先輩の無念を晴らすべく、半年以上前から準備を重ねてきた3年次生達。OB、OGも応援に駆けつける中、試合に臨んだ。

今回のテーマは「日本企業が株式の持ち合いを解消することは、日本経済にとってプラスである」。このテーマにそって肯定、否定側の立場から討論を行う。第1戦は対関西大学。木下、海野、熊川、徐、鎌水、斎藤、松元の7人は肯定派。出だしは緊張が見られたが、途中から勢いに乗り、熱戦を繰り広げる。結果は惜しくも負けてしまったが、講評でもあったように、とても僅差の試合だった。

第2戦は対城西大学。伊澤、奥山、神宮、室井、小林、斉藤、岩佐、金の8人が否定派で参加。冷静に相手チームの発言の矛盾を指摘し、積極的に攻める！ また仲間の発言にすばやく補足を付け足すなど抜群のチームワークを発揮。その結果、見事に念願の1勝を獲得し、「勝てたのは永江先生の熱心な指導のおかげです」と喜びを語った。

ゼミ生の健闘を手に汗を握りながら見守った永江助教授は「勝ち負けよりも地力が上がったことがうれしい。結果には両試合とも満足しています」。

一人ひとりが成長
結果に表れて

各大学で最も活躍した人に贈られる奨励賞を受賞したのはゼミ長の木下理さん。「受賞は素直にうれしい。チームは負けてしまったが、ディベートを通して学んだことは大きかった。就職活動など今後に活かしていきたい」と話した。

私自身も2年次から数々のディベートを行ってきた。着々と力をつけてきたことを実感したのは就職活動である。いかに相手を納得させるか、不測の質問にどう対応するか、根本的なものはディベートと面接はよく似ている。試合当日の結果は勝ち負けだが、ゼミ生一人ひとりの成長は確かな結果として残る。それこそが一番の成果だと言えるだろう。

来年こそは念願のリーグ優勝を！ 永江助教授、そしてゼミ生達の願いは一つ。先輩の勇姿を見てきた2年次生達。来年の活躍に期待したい。



対関西大学での熱い議論



熱心にメモを取る水口さん



相手の矛盾点をチームで追及(対城西大学)

【寄稿】長崎でアカデミーに参加

日・独の環境政策を考える

ハレ大学から講師

長崎大学での環境アカデミーに参加した山下智さんに体験記を寄稿してもらった。

国際交流協定校であるドイツのマルティンルター大学ハレ・ヴィッテンベルク(以下、ハレ大学)と長崎大学の共同プログラム「日独サマーアカデミー 日本とドイツにおける環境政策」に、9月4日から17日まで参加してきました。

法学部の非常勤講師である宗像優先生の特殊講義「環境と政治」を受講していて、先生からこのお話をいただき参加したものです。プログラムはドイツ学術交流会(DAAD)の後援を受け開講され、DAADやドイツ大使館などから多くの支援がありました。

ハレ大学の日本学の学生6人と3人の講師が参加。現在、専修大学大学院で勉強中のハレ大学からの留学生、ズザンネ・ブリュックシュさんも講師の1人でした。

共通語として英語を採用した授業は、かなり大変

で、なんとか発言することで精いっぱいでしたが、今夏の短期留学プログラムでドイツへ行き、今では英語よりドイツ語のほうが話せるので、プライベートではできるだけドイツ語で話そうと努力し、それがいい勉強になりました。

企業、NGO訪問も

授業は序盤に講師の方々へのレクチャーを受け、週の後半は三つのグループに分かれ、テーマに沿った形で調査をしながら、最後はプレゼンテーションをするというものでした。私は「企業、NGO、行政のパートナーシップ」を選択。このグループは企業、NGO、行政がどのように関わっていったら、持続可能な発展を社会が成し遂げられるのかを考えるものでした。議論するだけでなく実際に企業やNGO、行政を訪問、インタビューもし、現場の声が聞けたことは貴重な経験でした。

またエクサカーションとして、ハウステンボスの浄水施設を見学したり、諫早湾で漁師をしている方々から、干拓事業の深刻な被害状況などを聞いたりしました。実際に話を聞いて、彼らの苦しみがいかに感じられましたし、また、自分にはどうすることもできない憤りも感じました。

今回のアカデミーはかけがえのないものとなりました。いろいろな人から話も聞けましたし、長崎大学の学生はもちろん、ドイツ人の方ともつながりができました。

興味がある「ドイツ・環境」といったことに対し積極的に行動したので、こういったプログラムに参加できたのだと思います。来年、社会人として新たな一歩を踏み出しますが、こういった経験を生かして、さらなる躍進を遂げたいと思います。



アカデミー終了後、校舎前で(最後列右端が山下さん)



ハウステンボスの浄水施設を見学

経済・泉留維ゼミ

無農薬…手作り農法… コメ作りに挑戦

経済学部 泉留維ゼミ(20人)が、本格的なコメ作りに挑戦した。今年3月の開墾から種まき、苗作り、田植え、草取りを経て11月中旬、黄金色に実った稲刈りを行った。環境を考えながらの「モノ作り」の大切さを実感したゼミ生代表と泉講師に、一連の作業の様子を聞いた。



放棄状態だった土地を開墾

荒れた土地で

コメ作りは、一切の農薬、除草剤や化学肥料を用いず、昔ながらの手作業にこだわった。出来るだけ自然に近い、環境にやさしい農法を心がけた。横浜市青葉区の寺家ふるさと村の一角。指導は、脱サラで有機無農薬農業に転じて10年になる木村広夫さん。泉講師が専門分野の地域通貨の研究で知り合った人だ。



「収穫だ！」喜びにわくゼミ生と泉講師

3月下旬の開墾。「これが手ごわかったですよ」と2年次の本間多恵さん。

土地は10年近く放棄状態にあり、荒れていた。畦(あぜ)に沿っての掘り起こしは、雑草の根が深くはびこり容易に進まない。前日の雨降りで、土がぬかるんでいるのもネックだった。同時に田んぼ周辺の灌木、一面に侵食している竹を切り倒した。コメの生育には、日当たりが重要な要素となる。

4月下旬にもう一度開墾作業とクロ(田と田の間にある人が通る道)作りや苗代(田んぼの一部にある苗を育てる場所)作り、畦切りをした。その日は気温30度近くで休み休みの作業となった。

梅雨入り後の6月の2日間、苗取りから田植えを行った。コメの品種は古代米に近い晩稲「栄光」。4月下旬に苗場に種を蒔き、育った苗を取り出し、土をいねいに払い、4本をひとつの束にする。

その翌日、いよいよ田植えた。残念ながら既に開墾した田んぼは使うことが出来ず、その隣の田んぼ(2枚)で行った。一列に並び、束にした苗を等間隔に植えていく。まっすぐに植えるようロープを張り、ロープの移動に沿って植えていくが、なかなかまっすぐにならない。「ロープを持っている方がしんどかった」と宮崎岳史ゼミ長(3年)。

田植えから2週間後と4週間後に草取りをした。苗は順調に育っていたが、無農薬農法のため、初期除草をしっかりとっておかないと、雑草の根が強くはびこり稲の生育に影響を与える。草取りは大きなポイントだ。

体験から考える力

これで田んぼの作業は一段落。あとは稲刈りを待つばかりだ。ゼミ生の中には、新潟県の農家出身で農業を手伝った経験がある学生は二人いたが、機械化が進んだ中での作業であり、徹底した手作り農法は全員が初体験。

ドロだらけになって足がつったり、腰を悪くした学生もいた。慣れない手つきでの作業の連続だったが、田んぼにはおたまじゃくしが泳ぎ、カモが舞い降りて浮き草をついばむ。そんな自然環境で、稲を「一から」育てる喜びを味わった。

本間さんは「もともと“自然派”でしたが、ゼミで田植えまでするとは。実際にはとてもやりがいを感じ、田植えから2週間経って稲が確実に育っているのを見た時は、感激でした」。宮崎ゼミ長は「楽しみながらの作業で、稲刈り、収穫を心待ちにしました」と話す。

泉ゼミの主なテーマは「持続可能な社会づくり」「環境と経済」「環境保全と経済成長」「地球環境問題」。

「テキストよりもまず体験」をモットーにする泉講師は「体で学ぶことにより、考える力を身につけてほしい。自分の体験から語る言葉ほど強いものはない」とゼミ生に、フィールドワークの大切さを説いている。